

教育実習の在り方について

— 理科における教育実習改善に関する基礎的研究 (Ⅱ) —

平賀 博之 沓脱 侑記 岡本 英治 小茂田聖士
山下 雅文 柏原 林造 田中 伸也 林 靖弘
磯崎 哲夫 木下 博義 松浦 拓也

1. はじめに

この研究は、広島大学附属福山中・高等学校（以下、当校）での理科における教育実習の改善を目的として行う研究の2年次である。1年次にあたる昨年度は、教育実習生に対して実施した質問調査から、実習生の状況をまとめ、その上で、教育実習生の実態に即した対応ができるように、実習改善のための視点を明らかにした¹⁾。

2011年度は、「中・高等学校教育実習Ⅱ」（以下、教育実習Ⅱ）が6月に2週間、「中・高等学校教育実習Ⅰ」（以下、教育実習Ⅰ）が9月と10月にそれぞれ2週間おこなわれ、当校の理科では合計86名の教育実習生を受け入れた。実習生を受け入れる側から見て、実習生の状況は年々変化していると感じる。ITの活用能力などのように進歩した面もあるが、以前は細かく指示しなくてもできていた内容の指導に苦労することも多い。ただ「やってみなさい」では動かない、動けない実習生が増えている。概して言えば、以前よりもきめ細かな指導が必要になっていると感じる。教育実習期間中に実習生の力を伸ばすには、実習生の学習履歴や経験などの状況把握が欠かせない。こうした考え方に基づいて、この研究は構想された。

今年度の研究では、昨年に引き続き実施した実習生に対する質問紙調査の結果をまず報告する。また、それをもとに、具体的な教育実習の改善を構想する。今年度の教育実習の中で試行した一部の改善についても報告する。

2. 理科の教育実習生に対する質問調査

2011年度におけるこの研究の質問調査は、教育実習Ⅰ（9月：36名・10月：30名、計66名）と教育実習Ⅱ（6月：20名）、合計86名を対象として実施した。質問

紙は、昨年度同様の内容で、教育実習開始時の状況を把握するための「事前調査」と実習終了時の状況把握のための「事後調査」をそれぞれ実施した。質問紙調査の質問内容を表1（事前調査）、表2（事後調査）に示す。回収率はいずれも100%であった。所属学部別の人数は、教育実習Ⅰは、9月実習と10月実習で、教育学部31名、理学部34名、医学部1名、教育実習Ⅱは、理学部10名、生物生産学部10名であった。以後の分析では、実習Ⅰの教育学部と教育学部以外の学部、実習Ⅱの3つのグループに分けて、統計的な比較をおこなった。

まず、昨年度の研究で検討した内容が、今年度の調査で同様の傾向が見られるかどうかのチェックをおこなった。また、昨年度は6月に実施される教育実習Ⅱの実習生については、調査を実施することができなかったため、今年度の分析は、教育実習Ⅱの実習生と、教育実習Ⅰの実習生との比較を中心に記述する。

質問紙調査の結果を、表3にまとめる。

事前調査の質問3と事後調査の質問1については、「受験」「不受験」「未定」に分類した。事前調査の質問12については項目ごとの頻度を、事前調査の質問4、13、事後調査の質問6、7については、それぞれの尺度に付した番号と同じ点数を与え、その平均値と標準偏差を求めた。また、事前調査の質問6、14、事後調査の質問5、8については、重視・重要と思うものから順に3つを選ばせ、項目ごとにその頻度を求めた。後の分析では、集団ごとに分布に差がある統計的なデータについてはF検定をおこない、平均値の差がF検定の値の半値よりも大きい場合に、「有意差がある」とみなしている。自由記述(事前調査の質問1、2、5、8、10、11、事後調査の質問2、3、4、9)の内容は、回答を類型化し、頻度を見たが、その内容については、以下の関連する項目で記述する。

Hiroyuki Hiraga, Yuki Kutsunugi, Eiji Okamoto, Masashi Komoda, Masafumi Yamashita, Rinzo Kashihara, Shinnya Tanaka, Yasuhiro Hayashi, Tetsuo Isozaki, Hiroyoshi Kinoshita, Takuya Matsuura: Improvement of the teaching practice for science teachers (Ⅱ)

表1 2011年 理科教育実習生への〈事前〉質問調査
質問内容

質問1	教員免許を取得したいと考えた動機・理由
質問2	教員免許を取得したいと考えたとき、他の教科ではなく「理科」にした動機・理由
質問3	教員採用試験の受験を予定していますか。
質問4	自分の現在のようすにあてはまるもの(4段階の尺度 4:強く思う 3:そう思う 2:そう思わない 1:強く思わない)で回答する。 ①「理科」が好きである ②「物理」が好きである ③「化学」が好きである ④「生物」が好きである ⑤「地学」が好きである ⑥「物理」が得意である ⑦「化学」が得意である ⑧「生物」が得意である ⑨「地学」が得意である
質問5	あなたは、理科を通してどのようなことを生徒に教えたいと考えていますか。
質問6	あなたは理科の授業を構築する上で、どのようなことを重視したいと考えていますか。次の1～9の中で、特に重視したいものから順に3つ選んでください。 1 理科に関する知識や理解 2 論理的な思考(仮説から出発して論理的に道筋をたてて考えていく) 3 感覚的な思考(なんとなく感じたまま考えていく) 4 直観的な思考(いきなり本質的な考えや発想が思いついてそれを検証しながら考えていく) 5 データに基づいた思考(データや資料に基づいて考えていく) 6 たとえを多用した思考(わかりやすいたとえや比喩を使って考えていく) 7 比較しながらの思考(いろいろなものと比べながら考えていく) 8 図式化しながらの思考(図や意味マップを使いながら考えていく) 9 本当かなと考えながらの思考(本の内容や人の意見・データなど、本当に正しいかどうか考えながら考えていく)
質問7	中学校のとき、どのくらいの頻度で実験や観察を行いましたか。(頻度を次の1～6から選択) 1 毎週1回以上 2 2週間に1回程度 3 3週間に1回程度 4 1ヶ月に1回程度 5 1年間に数回程度 6 ほとんどなかった
質問8	高校時代の理科の授業で履修した科目を答えてください。 1 「物理I」または「物理I A・I B」 2 「化学I」または「化学I A・I B」 3 「生物I」または「生物I A・I B」 4 「地学I」または「地学I A・I B」 5 「物理II」 6 「化学II」 7 「生物II」 8 「地学II」
質問9	高等学校のとき、どのくらいの頻度で実験や観察を行いましたか。(頻度を次の1～6から選択) 1 毎週1回以上 2 2週間に1回程度 3 3週間に1回程度 4 1ヶ月に1回程度 5 1年間に数回程度 6 ほとんどなかった
質問10	高等学校のとき、理科で学習した内容の中で、最も興味深いと感じた内容を記述してください。
質問11	今回の教育実習に、授業構築の参考になると考えて持参した、書籍名を記入してください。
質問12	①自分の科目に関する書籍(専門書、一般書を含む)を何冊程度所有していますか。 1. 0～10冊 2. 10～20冊 3. 20～50冊 4. 50冊以上 ②①の書籍の中で、読み切った(学習し終えた)本は何冊程度ありますか。
質問13	実習開始にあたって、次の事項に対してどの程度不安に思っていますか。(4段階の尺度 4:とても不安 3:少し不安 2:あまり不安でない 1:全く不安でない)で回答する。 ① 授業で教える内容(内容を十分に理解できているか) ② 授業のやりかた(分かるように教えることができるか) ③ 苦手な分野について質問されること。 ④ 実験装置などを自分で準備すること。 ⑤ 授業中の生徒とのつきあい方
質問14	教育実習で1時間の授業をするのに、次の1～7のどの項目を重視して、授業やその準備を行いたいですか。重要と思うものから3つを順に選んでください。 1 教材研究 2 指導計画の立案 3 学習指導の技術 4 学習の評価 5 生徒把握・生徒理解 6 生徒指導(授業態度など) 7 興味関心を引きつけるトピックス的なネタ

(1) 教員採用試験の受験予定

表3-1は、教員採用試験の受験を予定しているかを、教育実習の前後で比較した。昨年度は、事前調査で「受験しない」と回答したが、事後調査で「受験する」に変化した教育実習生が特に理学部に見られ、教育実習の経験が、教員への志望動機を高めたと考えられると記述したが、今年度は、総数では逆に事後調査で「受験する」とした人数が10名減となっており、有意に低い。特に教育学部の実習生で、事前では「受験する」と答えた10名が、事後では4名が「受験しない」

表2 2011年 理科教育実習生への〈事後〉質問調査
質問内容

質問1	教員採用試験の受験を予定していますか。
質問2	もし、教員採用試験を受けるとしたら、これから採用試験までのあいだに、自分に何が必要だと考えますか。
質問3	あなたは、理科を通してどのようなことを生徒に教えたいと考えようになりましたか。
質問4	今回の教育実習で、授業を組み立てる参考になった書籍名を記入してください。
質問5	あなたが今後理科の授業をする機会があった場合、理科の授業を組み立てる上で、どのようなことを重視したいと考えていますか。次の1～9の中で、特に重視したいものから順に3つ選んでください。 1 理科に関する知識や理解 2 論理的な思考(仮説から出発して論理的に道筋をたてて考えていく) 3 感覚的な思考(なんとなく感じたまま考えていく) 4 直観的な思考(いきなり本質的な考えや発想が思いついてそれを検証しながら考えていく) 5 データに基づいた思考(データや資料に基づいて考えていく) 6 たとえを多用した思考(わかりやすいたとえや比喩を使って考えていく) 7 比較しながらの思考(いろいろなものと比べながら考えていく) 8 図式化しながらの思考(図や意味マップを使いながら考えていく) 9 本当かなと考えながらの思考(本の内容や人の意見・データなど、本当に正しいかどうか考えながら考えていく)
質問6	実習修了にあたって、次の事項に対してどの程度達成感を感じていますか。(4段階の尺度 4:とても満足 3:少し満足 2:あまり満足でない 1:全く満足でない)で回答する。 ① 授業で教えた内容(内容を十分に理解できていたか) ② 授業のやりかた(分かるように教えることができたか) ③ 生徒の質問への対応(十分に答えることができたか) ④ 実験装置などを自分で準備したこと。 ⑤ 授業中の児童・生徒とのつきあい方 ⑥ 今回の教育実習全体を総合して
質問7	教育実習の前の意気込みや思いはどの程度達成できましたか。(4段階の尺度 4:十分達成できた 3:少し達成できた 2:あまり達成できなかった 1:全く達成できなかった)で回答する。 ① 教材研究 2 指導計画の立案 3 学習指導の技術 ② 学習の評価 ③ 生徒把握・生徒理解 ④ 生徒指導(授業態度など) ⑤ 興味関心を引きつけるトピックス的なネタ
質問8	実習修了にあたって、もしもう1時間授業を行うとしたら、次の1～7のどの項目を重視して、授業を行いたいですか。重要と思うものから3つを順に選んでください。
質問9	もし将来教師になるとしたら、これから教師になるまでのあいだに、自分に何が必要だと考えますか。

へ、4名が「未定」へ、2名が未回答へと変化している。クロス集計を用いての十分な検討をおこなったわけではないが、これら10名は事前調査(質問13)で、不安が高い傾向が見られる。また、事後調査(質問7)などの記述内容を見ると、レベルの高い自己目標を設定し、それが達成できず、自分の教員としての適正に疑問を感じたなど、実習で壁にぶつかったようすがうかがえるものもあった。

教育実習Ⅱ(6月実習)の実習生は、「受験する」とした割合が、実習Ⅰの教育学部以外の実習生と比較しても有意に低い。実習Ⅱの実習生の事前調査(質問1)の記述内容を見ると、「資格を得るため」が最も多く、次いで「経験したことが将来役に立つ」「親に勧められたから」の順になっており、実習Ⅰで最も多かった「教員になりたいから」という意識との差がある。

(2) 授業を構築する視点

表3-2は、理科の授業を構築する上で、どのようなことを重視したいと考えているかを、最も重視するものから順に3つ回答させた結果である。実習Ⅰでは、

表3 2011年 理科教育実習生への質問調査 回答のまとめ

1 教員採用試験の受験を予定しているか 事前調査 (質問3), 事後調査 (質問1)

	事前調査 教員採用試験の受験予定					事後調査 教員採用試験の受験予定				
	1 受験する	2 受験しない	3 未定	未解答	総計	1 受験する	2 受験しない	3 未定	未解答	総計
1 教育学部	27	0	2	2	31	17	5	6	3	31
2 教育学部以外(実習Ⅰ)	22	3	10	0	35	24	4	6	1	35
3 教育学部以外(実習Ⅱ)	4	4	12	0	20	2	6	12	0	20
総計	53	7	24	2	86	43	15	24	4	86

2 理科の授業を構築する上で、どのようなことを重視したいと考えているか

事前調査 (質問6), 事後調査 (質問5)

事前調査(質問6)	教育学部(実習Ⅰ)				教育学部以外(実習Ⅰ)				教育学部以外(実習Ⅱ)			
	最も	2番目	3番目	1~3合計	最も	2番目	3番目	1~3合計	最も	2番目	3番目	1~3合計
理科に関する知識や理解	7	6	9	22	11	4	2	17	14	2	2	18
論理的な思考	16	5	3	24	14	7	4	25	2	11	3	16
感覚的な思考	1	2	3	6	0	1	3	4	3	2	3	8
直観的な思考	0	1	1	2	1	0	2	3	0	0	1	1
データに基づいた思考	0	4	3	7	2	7	7	16	0	2	2	4
たとえを多用した思考	1	1	3	5	1	3	4	8	0	0	0	0
比較しながらの思考	2	1	6	9	0	4	6	10	1	3	9	13
図式化しながら思考	0	5	2	7	0	5	5	10	0	0	0	0
本当かなと考えながらの思考	4	6	1	11	6	4	2	12	0	0	0	0

事後調査(質問5)	教育学部(実習Ⅰ)				教育学部以外(実習Ⅰ)				教育学部以外(実習Ⅱ)			
	最も	2番目	3番目	1~3合計	最も	2番目	3番目	1~3合計	最も	2番目	3番目	1~3合計
理科に関する知識や理解	22	3	1	26	20	4	6	30	4	1	8	13
論理的な思考	2	13	7	22	7	15	4	26	4	3	0	7
感覚的な思考	3	6	8	17	1	7	9	17	1	4	1	6
直観的な思考	0	1	1	2	0	1	1	2	0	2	0	2
データに基づいた思考	1	2	3	6	0	2	5	7	3	3	1	7
たとえを多用した思考	0	0	1	1	0	1	0	1	2	3	2	7
比較しながらの思考	2	5	7	14	5	3	8	16	1	2	1	4
図式化しながら思考	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	3	6
本当かなと考えながらの思考	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	4	8

3 実習開始前の不安と、実習終了後の達成感 事前調査 (質問13), 事後調査 (質問6, 質問7)

事前調査(質問13)	教育学部(実習Ⅰ)					教育学部以外(実習Ⅰ)					教育学部以外(実習Ⅱ)							
	4	3	2	1	平均	標準偏差	4	3	2	1	平均	標準偏差	4	3	2	1	平均	標準偏差
内容の不安	7	18	5	1	3.00	0.73	7	22	6	0	3.03	0.62	7	7	5	1	3.00	0.92
授業方法の不安	12	17	2	0	3.32	0.60	21	10	4	0	3.49	0.70	14	4	1	1	3.55	0.83
苦手分野の不安	16	11	4	0	3.39	0.72	21	10	4	0	3.49	0.70	11	7	2	0	3.45	0.69
実験準備の不安	0	17	13	1	2.52	0.57	3	18	8	6	2.51	0.89	7	11	2	0	3.25	0.64
生徒対応の不安	5	9	15	2	2.52	0.93	6	19	10	0	2.89	0.68	5	11	4	0	3.05	0.69

4:とても不安 3:少し不安 2:あまり不安でない 1:全く不安でない

事後調査(質問6)	教育学部(実習Ⅰ)					教育学部以外(実習Ⅰ)					教育学部以外(実習Ⅱ)							
	4	3	2	1	平均	標準偏差	4	3	2	1	平均	標準偏差	4	3	2	1	平均	標準偏差
内容の達成感	3	20	8	0	2.84	0.58	5	20	8	2	2.80	0.76	2	6	9	3	2.35	0.88
授業方法の達成感	1	15	10	4	2.43	0.77	3	10	17	5	2.31	0.83	0	8	9	3	2.25	0.72
苦手分野の達成感	1	14	14	2	2.45	0.68	1	12	16	6	2.23	0.77	0	6	12	2	2.20	0.62
実験準備の達成感	8	16	6	1	3.00	0.77	12	16	6	1	3.11	0.80	1	14	5	0	2.80	0.52
生徒対応の達成感	7	8	16	0	2.71	0.82	3	10	16	6	2.29	0.86	0	7	11	2	2.25	0.64
全体的な達成感	10	13	7	1	3.03	0.84	5	17	12	1	2.74	0.74	1	10	9	0	2.60	0.60

4:とても満足 3:少し満足 2:あまり満足でない 1:全く満足でない

事後調査(質問7)	教育学部(実習Ⅰ)					教育学部以外(実習Ⅰ)					教育学部以外(実習Ⅱ)							
	4	3	2	1	平均	標準偏差	4	3	2	1	平均	標準偏差	4	3	2	1	平均	標準偏差
意気込みや思いの達成	7	11	12	1	2.77	0.84	3	18	12	2	2.63	0.73	1	12	7	0	2.70	0.57

4:十分達成できた 3:少し達成できた 2:あまり達成できなかった 1:全く達成できなかった

4 次の1~7のどの項目を重視して、授業やその準備を行いたい、事前調査 (質問14), 事後調査 (質問8)

事前	教育学部(実習Ⅰ)				教育学部以外(実習Ⅰ)				教育学部以外(実習Ⅱ)			
	最も	2番目	3番目	1~3合計	最も	2番目	3番目	1~3合計	最も	2番目	3番目	1~3合計
1 教材研究	22	3	1	26	20	4	6	30	14	2	2	18
2 指導計画の立案	2	13	7	22	7	15	4	26	2	11	3	16
3 学習指導の技術	3	6	8	17	1	7	9	17	3	2	3	8
4 学習の評価	0	1	1	2	0	1	1	2	0	0	1	1
5 生徒把握・生徒理解	1	2	3	6	0	2	5	7	0	2	2	4
6 生徒指導(授業態度など)	0	0	1	1	0	1	0	1	0	0	0	0
7 興味関心を引きつけるトピックス的なネタ	2	5	7	14	5	3	8	16	1	3	9	13

事後	教育学部(実習Ⅰ)				教育学部以外(実習Ⅰ)				教育+理 合計			
	最も	2番目	3番目	1~3合計	最も	2番目	3番目	1~3合計	最も	2番目	3番目	1~3合計
1 教材研究	17	8	4	29	23	7	1	31	11	2	4	17
2 指導計画の立案	2	7	5	14	4	5	7	16	2	4	3	9
3 学習指導の技術	8	4	8	20	3	14	11	28	2	7	5	14
4 学習の評価	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
5 生徒把握・生徒理解	4	7	5	16	1	7	4	12	0	3	2	5
6 生徒指導(授業態度など)	0	0	2	2	1	0	0	1	1	0	1	2
7 興味関心を引きつけるトピックス的なネタ	0	4	7	11	3	2	12	17	4	4	5	13

事前調査と事後調査を比較すると、最も重視すると答えた項目について事後で「論理的な思考」が有意に減少し、「理科に関する知識や理解」が有意に増加するという結果が見られた。これは昨年度と同様の結果であり、実際に教壇に立って授業をして、教科の内容をきちんと整理し生徒に伝えることの大切さ、難しさを感じ、それが授業の基本であると考えように変化したことが考えられる。

実習Ⅱの実習生ではこれと逆の傾向が現れた。事後で「理科に関する知識や理解」が有意に減少し、「論理的な思考」が有意に増加するという結果になっている。実習Ⅱでは、最初の指導案作成の時点で、内容を羅列しただけの指導案が多く見られたという印象がある。指導教員から科学的な思考を授業展開の中で重視するように求められたことが変容につながったと考えている。

(3) 実習前の不安と実習後の達成感

表3-3は、教育実習開始の時点での各項目に対する不安の程度と、実習終了の時点での各項目に対する達成感の程度を示したものである。昨年度指摘した、教育学部よりも教育学部以外で不安の割合が高いという傾向は、今回の調査では有意差は見られなかった。またこの項目については、実習Ⅰと実習Ⅱでの有意差も見られなかった。

(4) 授業の準備で重視すること

表3-4は、理科の授業の準備する上で、どのようなことを重視したいと考えているかを、最も重視するものから順に3つ回答させた結果である。この項目については、昨年度と今年度の比較で、また実習Ⅰと実習Ⅱの比較で、有意な差は見られなかった。

(5) その他の項目での気付き

記述内容を整理してみても、「教育学部と教育学部以外」、「実習Ⅰと実習Ⅱ」で比較しても、記述内容の傾向に大きな差は見られなかった。その中で、いくつかの気付きをあげておく。

実習の事前打ち合わせでは、これまでに使ってきた書籍を、実習期間中必要に応じて持参するように指示している。今年度の事後調査(質問3)の記述では、昨年度と比較して、持参した専門書(大学での教科書等、図鑑やビジュアルな資料集なども含む)が役に立ったという記述が増えた。確かに、実際に授業の中でパワーポイントを使って資料を提示したり、電子黒板を授業に利用する例も見られるなど、教育実習生のIT活用能力は、めざましい進歩を遂げている。そうした

提示資料にこれらの書籍を参照したり、Webで画像等を検索して利用するなどの姿が見られた。

6月実習(実習Ⅱ)、9月実習(実習Ⅰ前期)では「授業を構想する際に、何をどこまで教えるべきか、その点で何を基準にしたらよいか」を悩んだという記述が目立った。教育実習での初めての授業、あるいはその次の授業あたりでは、この点が実習生にとって大きな障害・障壁であると考えられる。そのため、広島地区での実習を9月に経験した10月実習の実習生では、この記述が見られなかったのだと考える。実習生の理解や判断で解決できない部分で悩まずにすむようにすることは、短期間の実習では必要だと感じている。

「自身が理解していること」と「理解できるように教えること」とのギャップに苦しんでいた様子が窺える記述も多いが、それは悩んで実習生自らが解決すべき問題であろう。

4. 教育実習の改善に向けて

昨年度の報告では、アンケートの分析結果の内容分類に基づいて、教育実習の改善に向けての視点を示した。今年度は、重要だと考えるいくつかのポイントに沿って、改善案を以下に示す。

(1) 実習校からの情報発信

2年間にわたる質問紙調査で、実習生は実習前に多くの不安を抱えており、学生ごとに不安の内容や程度は異なることを感じた。実習生が抱える不安については、大野木・宮川(1996)²⁾や藤中・中山(2004)³⁾で検討され、後者は「実習生の目標達成を妨げる要因として、実習不安が働く可能性があり、不安を事前に解消できるような、オリエンテーションや事前指導を提供する必要性がある」ことを指摘している。

実習生の抱く不安には、実際に実習を経験すると、容易に解決するものもある。それらは十分な情報提供によって、不安が解消できるものも多い。また、学力面での不安や指導法に関する不安、生徒理解や生徒把握の方法など、解決にはさらなる学習や経験を要求される、解決に時間のかかる不安も存在する。少なくとも前者については、実習校からの情報発信によって、実習前に解決できるものもあると考える。

具体的には、事前指導あるいはそれ以前の段階でも、実習生が参照できるWebページなどを準備し、そこで必要な情報を発信することが考えられる。情報の内容は、次のような例が考えられる。

- ① 実習生の学力への不安に対する情報
・参考図書、参考webページ
- ② 実習生の指導計画立案のための参考資料

- ・実習授業の内容や範囲
- ・指導案の事例、解説
- ・実習担当教員から見た生徒感
- ・専門書等の活用法
- ・活用力や思考力の考え方

③ 実習にあたっての心構えに関する資料

- ・実習担当教員からのメッセージ
- ・過去の実習生のメッセージ

④ その他の資料

①の参考図書は、専門とする科目でぜひ持っておきたい書籍の紹介や、専門以外の科目での推薦図書などである。実習生の専門とする科目については、それぞれの内容についての大学の教科書などである。専門以外の科目では、新書程度の入門的な内容の啓蒙書なども含む。そこで得られる知識は、学習参考書の知識とちがいで、学問の現場における発見の驚きや感動を伝えるストーリーを有している。そうした蓄積が重要であることを、実習生に認識してもらいたい。

②については、教育実習事前打ち合わせの際に提供していた情報を含んでいる。実習生が授業を構想するときに、多くの場合は自分が中学、高校生だった時の経験を基にして考えている。実習校の生徒に対しての「生徒観」をいくらかでも感じることができれば、授業内容をどのようにしたいか、実習生が判断し決定できるだろう。内容面で知識の正確さを確認したり、より深い内容を求めるといった、いわゆる教材研究の際に、教科書で扱われていない内容については、専門書の系統的で正確な記述が最も確実な情報であると考えられる。専門書をどのように教材研究に利用していけばよいのか、以前は教えるまでもないことであったが、近年はこうした話を折に触れてするようにしている。具体的にどのように内容を掘り下げていくのか、そうしたハウツーも情報として与えることも検討したい。

③については、実習生自身が「楽しい」、「面白い」と感じたことを、生徒にわかりやすく、かつ正確に伝えるためには、より高次の知識・理解が必要であるということに気付いた実習生も多い。こうした体験を掲載することの意味は大きいと考える。

(2) 教育実習での目標の明確化

教育実習の期間で、実習生が教員に求められるすべての知識や技能を完成し、すぐにでも教育現場に行くことができるレベルまで到達することは不可能である。「短期間の実習では、習得すべき技術の範囲を限定し、かつ、その中の基本的な技術に主眼を置く必要がある。」⁴⁾ ことを広島大学の中・高等学校教育実習

の手引きでは記述している。また、「技術を習得する場合、まず基本的な型に入って、稽古をすることが重要である。」とも記述している。では、基本的な型とはどのようなものか。実習生はどの段階まで到達できることが、実習期間中の目標となるのであろうか。

もちろん能力や技能の個人差もあるが、全員が到達すべき規準が、実習生に示されることで、実習生が不安を抱くことなく実習に臨めると考えられる。質問紙調査では、実習生として目指すべき授業像が、高いレベルにありすぎると感じられる実習生が見受けられた。

前出の「教育実習の手引き」では、理科の授業評価と授業改善の中で、批評会の討議内容として、以下の7項目を示している。

- ・授業者の反省に基づく授業のねらいと展開の説明：授業目標の適合、生徒の主体的な活動の保証の有無
- ・授業者の態度と行動：授業への取り組みの姿勢、教材研究の精緻、生徒の把握、実習における課題設定とその解決への取り組み
- ・発問の形態と内容：発問計画、発問の仕方、発問の内容、生徒の応答とその処理、
- ・板書：構造化された板書計画、作図等の適切さ、小黒板の活用法
- ・実験・観察の方法：実験・観察の目的の明確化、実験・観察器具の準備と後片づけ、実験中の机間巡視とそのあり方、安全への徹底した配慮、報告書作成の指示、演示実験の効果、適切な廃液処理
- ・生徒の活動：学習への生徒の参加度（興味・関心、学習意欲など）
- ・授業全体：授業目標の達成度、授業における問題点

これらの項目は、授業観察の観点でもあり、また、授業者が到達すべき規準を考える上で、参考になる。この中で、授業を繰り返し、経験を積むことで技能が向上することが期待される項目については、実習期間中に到達する目標としては設定せず、「基本的な型」にあたる学習指導案の作成に関わる、以下の7項目を設定した。

- 授業のねらいが適切に設定されている
- 学習内容の基礎的・基本的事項が明確になっている
- 学習内容を精緻に教材研究している
- 授業のねらいが実現できる構成になっている
- 適切な発問計画がなされている
- 実験・観察の目的が明確になっている
- 構造化された板書計画がなされている

この7項目は、学習指導案を作成する際のチェック項目としても活用できる。2011年度の教育実習指導に

において、これを実習生に示すことを試行した。実習生には、この7項目に漏れがないように学習指導案を作成させ、また指導教員に指導を受ける前に、それらについて説明ができるように検討を求めた。その結果、少なくとも学習指導案として最低限必要な内容を、ある程度のレベルで検討された状況で作成することができている。感覚としては、これら7項目を示さなかった場合に比べ、実習生が何を考えるべきかという把握ができているという面で、よい印象を持っている。最低限の型の整った指導案が作成できるようになったと感じている。

また、批評会もこの7項目に沿って進行することで、活発な討議になったと感じる。以前は、指導技術の未熟さを指摘することに終始するような批評会も見られたが、授業のねらいや構成に主眼を置いた批評を行うことで、授業者、授業観察者ともに成長が確認できている。

8. 研究成果と今後の課題

本研究は3年計画の2年次であり、昨年度に引き続き、教育実習生を対象にした質問紙調査をもとに、教育実習生の状況把握をおこない、教育実習の改善のための視点を明らかにした。今年度の新たな知見としては、教育実習Ⅰと教育実習Ⅱの実習生の意識等に差があることが明らかになった。これを踏まえた指導については、2012年度に向けて検討し、3年次の研究でその内容を記述していきたい。

教育実習の改善の方向として、実習校からの情報発信については、2012年度の教育実習で公開できるように内容の準備を進めている。また、教育実習での目標の明確化に関しては、さらに改善と試行を進める予定である。

3年次の研究では、本稿で示した教育実習改善の視点を具体化していき、それらの効果を検証していきたい。7項目の規準は、授業観察の観点としても有効であり、観察者が記入する評価シートの作成も予定している。

これらをもとに、教育実習実施校にとっても、教育実習生にとっても実り多い実習となることを目指して、実践並びに研究を継続していきたい。

引用（参考）文献

- 1) 平賀博之他, 教育実習の在り方について—理科における教育実習改善に関する基礎的研究—, 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要第39号, 2011
- 2) 大野木裕明・宮川充司, 教育実習不安の構造と変化, 教育心理学研究Vol.44, No.4, pp.454-462, 1996
- 3) 藤中隆久・中山玄三, 教育実習の目標到達度に関する実習生の自己評価, 熊本大学教育実践研究, 21, pp.27-42, 2004
- 4) 中・高等学校教育実習の手引き (平成23年度版), 広島大学教育学部他, 2011